

波多野澄雄先生のご退職を記念して

辻中 豊

波多野澄雄先生が2012年3月末でご退職されます。筑波大学全体にとって、人文社会系にとって、新しい博士後期課程専攻である国際日本研究専攻にとって、とても残念なことです。しかし、無事定年退職されるということはある意味で大変、目出度いことでもあります。

2008年に誕生した国際日本研究専攻にとっては、波多野先生が人文社会科学研究所長当時(2003年から2007年)にこの新専攻を構想されたという意味で文字通り生みの親にあたります。またその後、筑波大学理事・副学長(人事・評価担当)として本専攻だけでなく広く人文社会系の拡充にご尽力いただいたことはここに記して特に感謝したいと思います。人文社会系の多くの革新的なプログラムが先生のご努力で発展したことは特筆すべきです。それらは近年、大学の国際化に関して筑波大学が高く評価されるようになり、G30、国際交渉力プログラム、大学の世界展開力、など多くの競争的な事業を獲得し、筑波大学の人文社会系が新しい方向に国際的に発展する礎になったのです。

筆者にとって波多野先生は本学においていわばもっとも頼れる教員であり人生の先輩です。

波多野先生と小生は、長らく、同じかもしくは大変近い教育現場にいました。専門は広い意味で政治学分野であり共通するとはいえ、小生は政治学のなかでも現代政治学、政治分析、市民社会の比較調査研究を行い、もっぱら政治学会を活動の場とするのに対して、波多野先生は、国際関係史、政治史、日本外交史、軍事史などもっぱら「歴史」畑であり、国際政治学会や軍事史学会を活動の場とされています。先生のご著作ご研究は後述のように本冊子にはほぼ網羅的に記載するところです。また社会的貢献活動として、日本政府の公的な記録である「日本外交文書」編纂委員会の委員を務められ、現在は委員長(外務省、2009年～現在)という要職にあります。こうしたことから少し前には、「いわゆる密約問題に関する有識者委員会」の座長代理(外務省参与、2009年11月～2010年3月)「外交文書欠落問題調査委員会委員」(外務省参与、2010年4月～2010年6月)として、また日中関係では「日中歴史共同研究日本側委員」(外務省、2006年12月～2009年3月)として、さらにアジア歴史資料センター(2001年発足、内閣府国立公文書館内 <http://www.jacar.go.jp/>)の設立など、いずれも日本外交の現実政治的な争点に関する政府調査委員会で重要な役割を果たし続けられ、たびたびメディアに登場されたのも記憶に新しいところです。まさに、日本を代表する外交史家なのです。

歴史に疎い小生にとっては波多野先生から学ぶことばかりで、先生のご研究の学術的な意義を述べる能力はまったくありません。ここではせめて個人的なエピソードから皆さんに波多野先生の学問の香りを感じていただけたらと考えています。

波多野先生の実績としては後述のように、『太平洋戦争とアジア外交』(東京大学出版会、吉田茂賞)、『歴史としての日米安保条約』(岩波書店)、『国家と歴史』(中公新書)、The

End of the Pacific War: Reappraisals (Stanford U.P., 共著)などがあり、学会活動では日本国際政治学会事務局主任、理事・運営委員、軍事史学会副会長などを務めておられます。またエズラ・ボーゲル氏を代表とする国際共同研究「日中戦争に関する国際共同研究」(2001～09年)、入江昭、細谷千博教授らとともに「太平洋戦争開戦50周年国際会議」(1991年)など大型の国際会議の企画、運営、成果の刊行に尽力されてきました。

初めて波多野先生のお名前に接したのは、当時の基本組織である社会科学系政治学分野の臼井勝美教授から、1987年ごろでしょうか、「今度凄い教員が来ますよ」と聞いたときだったと思います。小生はその前年に赴任したばかりで、当時若手教員として政治学分野には、秋野豊、岩崎美紀子、久保文明(後、慶応義塾を経て東京大学)と小生の4名がいたようにと思います。臼井先生は退職に近いが、波多野先生がくればこれで一安心といった風情でした。ちなみに臼井先生はとても温厚な紳士で、かつて張学良などにもインタビューをされた日中関係史研究の第一人者です。本学を88年に退職されたのちも多くの著作をものにされ活躍されています。

波多野先生は、当時助教授であった秋野、H. クラインシュミット、山田直志、岩崎、の各先生方や辻中とともに、新国際システム特別プロジェクトや世界銀行プログラムなど様々な活動に取り組みました。そうしたことから、2010年から現在まで「世界銀行等大学院プログラム」のディレクターを兼務されました。

波多野先生を知る人はその温厚な人柄に皆救われる思いがいたしますが、他方で先生はとても熱心で粘り強いところがあり、様々な事業計画を自ら立案し、プロポーザルなども深夜遅くまで執務室で仕上げられています。研究科長時代や副学長の時に、休日の真夜中や朝方のメールを見て驚かれた方も多いのではないかと思います。

さて、先生のご学識は前述のように小生のよく述べるところではないのですが、様々な方に先生は頼られ、共同研究されていることに触れておきたいと思います。

初期には、高名な文芸評論家、江藤淳(1932-1999)氏との共同作業があります。1980年に出版された『占領史録』4巻の解題、86年の『終戦工作の記録』(いずれも講談社)の編集・監修を始めとして江藤淳氏の歴史的考察の学術的な基礎を提供したのは、波多野先生であったことです。

ハーバード大学教授の入江昭(アキラ・イリエ、1934-)氏も波多野先生と共同研究をし、その学識を頼みとした一人であると推察しています。細谷千博・本間長世・波多野澄雄『太平洋戦争』(東京大学出版会、1993年)、細谷千博・後藤乾一・波多野澄雄『太平洋戦争の終結—アジア・太平洋の戦後形成』(柏書房、1997年)にそれは結実しています。入江氏には、2008年に筑波大学での特別講義—大学と学問—(総合科目A: 1単位)において2週連続してそれぞれ「歴史を学ぶ」、「学問と人生」という題目により講義をしていただき、2010年にも特別講義をしていただきました。入江氏は、日本出身者として初めてアメリカ歴史学会会長(1988年、American Historical Association)を務めています。

波多野先生が、国際政治経済学研究科長に就任する直前に、同研究科長を務めたのは蒲島郁夫氏で同氏は3K棟の大学院部分の建物の設計時の科長でもあります。ご存じかもしれませんが、蒲島氏は、日本では大学に行かず、農協職員から渡米し、ハーバード大学で博士、そして本学教員となり、97年には東京大学に移籍し、2008年に熊本県知事になった、まさに異才かつ

偉才の人物です。その蒲島氏が一時期、満州事変に関して波多野先生と共同研究をされたことがあります（「満州事変収拾の政治過程」（蒲島郁夫と共著）（『レヴァイアサン』第8号、1990年4月）。その時、蒲島氏が小生に語ったのが、「波多野氏はすべての外交文書をそらんじている。論文の註を書くときに何も見ないでどんどん書いていく。恐ろしいばかりの知識の人だ」ということです。異才かつ偉才の人である蒲島氏をして驚愕させた博識、それが波多野先生です。研究者としての最初の仕事が外務省外交史料館での辞書編纂だと聞いておりますし、その後、防衛庁防衛研修所助手、同戦史部所員などをされているため、ほとんどの基礎資料は記憶の中にしっかりと埋め込まれていることが、この蒲島発言から理解されます。

波多野先生について小生が忘れられない2、3のエピソードをご紹介します。

波多野先生は、温厚な物腰ですが、偉才の人であることがお分かりになると思います。それ以外にも、先生には多くの謎があるようなのですが、小生もその謎が解けているわけではありません。高校時代は実はボクシングをしていたとか、大学では電気工学を専攻するため、当時は理工系しかなかった防衛大学校に進学したとか、しかし、学生運動の影響もあり、社会科学を学ぶため退学し、慶応大学法学部に再入学し、卒業後は大学院で政治学を専攻したとか、さらに最近でも副学長や図書館長という激職にありながら次々と学術書を出版されているとか、次々と波多野先生をめぐる歴史の謎は深まるばかりですが、いずれまたそれは誰かによって明らかにされる日が、政府の外交文書での密約問題のようにあるかと思いますが、今回はこの辺で、先生のご退職を記念しての、小生の拙文を終えることにいたします。

副学長（国際担当）
筑波大学